

分科会 1 - 1 今夏の暑さによる水稲への影響と今後の対策

質 問	回 答
<p>出穂時期にゲリラ豪雨に当たったことによる受粉や登熟への影響はありますか？ 時間雨量 100 mm級を立て続けに受けました。かなりの強風も受けました。</p>	<p>ゲリラ豪雨などに伴う強風や雨は受粉や登熟に悪影響を及ぼすことがあります。ゲリラ豪雨が出穂期頃に発生した場合、倒伏することは稀ですが、倒伏した際は受粉が正常に行われません。登熟に対する影響ですが、降雨は褐変粃やもみ枯細菌病等の病害の発生を助長し、強風による粃擦れはさらに病気を助長するため、登熟不良につながるおそれがあります。</p>

分科会 1 - 2 ここまでわかったイネカメムシの発生や防除

質 問	回 答
<p>有機栽培でカメムシ被害甚大でしたが、薬剤防除以外では対策はありますか？</p>	<p>化学合成農薬以外の資材でイネカメムシを効果的に防除可能な資材に関する情報が無いため、耕種的対策に寄らざるを得ないと考えます。</p> <p>令和6年の発生状況調査結果から、出穂期が8月中下旬以降となる作型・品種ではイネカメムシの多発時期と重複するためリスクが高いと考えられますので、出穂時期が8月中下旬以降にならないような作型・品種を選定することで被害が軽減する可能性があります。</p> <p>また、地域内で出穂時期が異なる水田（周囲の水田より出穂期が早い、もしくは遅い水田）では集中的な飛来・侵入を受けるリスクが高いため、極力、地域内で出穂時期が揃うように品種および作型を選定する必要があると考えられます。</p> <p>イネ科雑草の穂も餌として利用することから、水田内外および作付け地域周辺のイネ科雑草に穂をつけさせないよう、雑草管理に留意していただくことも重要と考えます。</p>

	<p>なお、出穂時期を挟む2週間ずつ（計4週間）の間で水田畦畔等の除草を行うと他の斑点米カメムシ類（アカヒゲホソミドリカスミカメ、アカスジカスミカメ、ホソハリカメムシ、クモヘリカメムシ等）を水田に追い込んでしまいますので、除草時期には注意していただくようお願いします。</p>
イネカメムシ成虫の移動（飛行）距離はどのくらい？	<p>イネカメムシ成虫の飛翔距離について詳しく述べられている資料が見当たりませんが、一般的に数百m程度とされています。</p> <p>一例として、令和6年夏秋季の観察結果をお示しします。</p> <p>農技研の所内雑草発生地でも令和6年7月～9月にかけて本虫の発生が認められましたが、近隣の水田から500m程度離れています。</p> <p>また、農技研本館にも夜間に飛来がありましたが、所内雑草発生地から300m程度離れています。これらのことを考慮すると、少なくとも300～500mは飛翔できると考えております。一方、日中に県内平坦地の水田や雑草地を観察した結果では、人が近づく等によって穂や植物体から飛び去る成虫は、数m～十数m飛翔して近くの穂や植物体に止まる行動を取ることが多いようです。日中は長い距離を連続して飛翔することは少ないかもしれません。</p>

分科会 1 - 3 水稻新品種「えみほころ」の栽培の留意点

質 問	回 答
資料内基肥 5Kg~7Kg などの数値は、10a あたりの窒素分量の理解で良いでしょうか。	ご質問いただいたとおり、10a あたりの窒素分量です。記入漏れがあり申し訳ございません。
実際に試験で利用した肥料は、一発型の肥料でしょうか。	一発肥料ではなく、基肥+追肥体系です。基肥として化成肥料 14-14-14、穂肥として化成肥料 17-0-17 を使用しました。
一発型の肥料を使う場合の考慮点などあるでしょうか。	出穂期が「彩のきずな」と「彩のかがやき」の中間であり、地域でそれぞれの品種に使われている一発施肥の中間になる緩効性肥料が適すると考えられます。今回の結果から「彩のきずな」、「彩のかがやき」と比べてより出穂期に近い穂肥施用で効果が高いことがわかりました。以上のことから、その中でも溶出時期がやや遅めのタイプが望ましいと考えられますが、最適な溶出日数やパターンについては明らかとなっていないため、今後研究していきたいと考えています。
試験栽培では、カメムシ対策はどのようにされたのでしょうか。(回数、時期など)	今年度は早植の出穂期 2 週間前頃 (7/17) に水稻栽培ほ場全体に粒剤を散布し、以後は発生に応じて薬剤防除を行いました。早植では出穂期 5 日後頃の 8/7、普通期では出穂期 7 日後頃の 8/26 に追加で液剤を散布しました。

分科会 1-5 アライグマはどこにいる？どこで捕まえる？

質 問	回 答
<p>アライグマのねぐらについてですが、毎日同じところを利用するのではなく、なわばりの中の数か所をその時々によって転々としているということでしょうか。同じ場所は何日に1回くらい訪れる/通過するでしょうか。また、時期別、特に猟期となる冬場によくいる場所や移動経路の特徴などがあればまとめていただけるとありがたいです。</p>	<p>毎日同じところを利用することもあります。ねぐらを転々とすることもあります。ねぐらとして把握できた場所は個体ごとのGPSデータ回収期間で変わってきますが、平均で6.8か所でした。ひと月に2～3か所を使うことが多いようです。各個体の生息圏内にあるねぐらを転々と移動しています。ねぐらごとの訪問頻度については明確な規則性は分かりません。</p> <p>また、季節ごとのねぐらや移動ルート・活動場所の選択についても明確な規則性は無いようです。アライグマの行動には明確な規則性が見られず、かなりランダムに動くようです。今回の調査では時期別、特に冬場の滞在地点の傾向について明確なことは分かりませんでした。</p> <p>季節ごとに捕獲場所を変えるよりは、年間を通じてアライグマの出没しやすい環境を見出して捕獲を進めることが基本になると思います。また、12月中旬から1月中旬にかけてアライグマの活動が鈍る期間があるものの、1月中旬以降の捕獲強化は出産前の雌の捕獲につながるため重要と考えています。</p> <p>アライグマの出没しやすい環境については今後資料としてまとめて公開する予定ですので、活用していただければと思います。</p>

分科会 1－6 牛のエサを最適化して温室効果ガスを削減

質 問	回 答
<p>ビール粕や飼料米、政府米の在庫が最近少ない為、他の原料を用いた方が供給及びコストダウンが可能だと思えますが如何でしょうか？</p>	<p>今回の試験では、これまでの状況から比較的安価に入手可能なビール粕、飼料用米で行いました。ご指摘の通り、現在の状況ではビール需要の低迷によるビール粕の価格高騰、米の価格高騰など状況が変化しつつあります。本研究は他機関とのプロジェクト研究として行っており、時代の状況に併せ新規資材の検討も並行して行っているところであり、成果が出次第、給与試験へつなげていきたいと考えます。</p>

分科会 2－7 イチゴの花芽分化を地温から考える

質 問	回 答
<p>花芽分化を進めるために培地温度を下げることは分かったのですが、具体的にどのような方法で遮光を行うのがよいのか検討されていますか？</p>	<p>今回、遮光の展張期間、遮光率、方法（開閉式またはベタ掛け）等の検討は実施しておりません。</p> <p>埼玉県において、夏季（7～8月）の育苗期間中は遮光が必須となっています。しかし、9月に入ると遮光資材を撤去する生産者が多く、残暑が厳しい年では培地温が高くなっていると予想されます。今回の情報提供では、残暑が長引く場合、8月末で終了していた遮光資材の展張を9月以降も延長することを提案しました。</p>